
BRAVE HEART ~ Last Dragon ~

ダンテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B R A V E H E A R T } L a s t D r a g o n }

【Nコード】

N 2 4 4 1 B A

【作者名】

ダンテ

【あらすじ】

「ハンターはモンスターを殺す為の道具じゃない！」

1人の少年は剣を取り、全身全霊で戦う。

大切な物を、皆を守るために。

やがて世界は知るだろう。

限界の無い人間は居ないと。

そして。

血を血で洗い流し、偽善を貫いた先には何が待つのか。

最も残酷で美しい、これはその物語。

はじめに(前書き)

性懲りもせずに『モンスターハンター』の二次創作です。

かなり長い物語になる予定ですが、どうぞよろしくお願い致します。

はじめに

この小説は『モンスターハンター』の二次創作です。

公式とは全く関係ありません。

また、以下の要素が含まれます。

- ・オリジナルモンスター登場予定。牙竜種や飛竜種等色々。
- ・原種モンスターの亜種、希少種登場予定。
- ・オリジナルの地名、村、都市がちよこつと登場予定。
- ・フロンティアモンスター登場予定。
- ・残酷描写有りまくり。

それでも良いという心の広い方はどうぞ。

長い長い物語になりますが、どうぞよろしくお願い致します。

はじめに（後書き）

次回から本編に入ります。

プロローグ（前書き）

なんかかなり展開が早いです、すいません。

プロローグ

この世には不思議な生き物が存在している。

それらは人々を襲い、暴虐の限りを尽くしてきた。

人はそれをモンスターと呼び、忌み嫌った。

やがて、そのモンスターを駆逐して行く狩人が現れた。

人々は彼ら狩人をモンスターを狩って行く姿を見てこう呼んだ…。

ハンターと…。

人里離れた辺境の中にちんまりとある集落。

此処は『シレン村』。

集落とでも言いそうな小さな村だが皆が助け合い暮らしてきた場所でもある。

「ジイさん、悪いけどこっちを手伝ってくれないか」

「ん？…はいよ」

刀の皮金造り中。

自分の仕事 - 太刀の皮金造りに熱中していた武器屋の老人は呼ばれて我に帰った。

老人は現在、女衆が拾ってきた鉄鉱石を引き延ばして刀身にくるむ為の皮金を作っているが、太刀の刀身を造っていた自身の相棒の方へ向かう。

皮金を造り終えてから、老人は重い腰を動かした。

「へへ、やっぱりジイさんの腕は一級品だな。刀身が良い形になりやがる」

「お前も精進せいや」

「はいはい」と

軽い返事だが、相棒の腕は腕利きである。

自分でも知らない刀身の硬質化方法を考案したのは彼だった。

まあ、刀身の微調整はまだまだだが。

「そついや、今日誰か来るんだっけ？」

「ああ、村の若い者が言ってたな…ハンターだっけかハンター。」

モンスターを狩る事を生業としており、最近村が専属のハンターを雇い、村周辺の警備、村に近づくモンスターの撃退や討伐に当た

らせている。

それ故にハンターは村の人間からも信頼を受け、尊敬の対象にされている。

「ようやくワシらの村にもハンターが…」

「ああ、長かった…」

村に住む若い人間は既に村周辺に生息するモンスターによって怪我人、死者を続出している。

ある者は鋭く湾曲した牙に突かれ、またある者は喉笛を噛み千切られた。

「そのハンターはいつ来るって？」

「夕方辺りには来るんじゃないかなア…」

そんなとりとめのない会話は、村を襲う前の静けさだった。

ガタガタガタ…

茶色の羽と嘴にある絶縁体のような肉が特徴である鳥竜種、ガーグアは荷車を引き引き山道を歩いて行く。

荷車には生肉が入った大きな箱が二つ乗せられていた。

「うっ…」

荷車の前部席に居座る帽子を深く被った行商人はガタガタと揺れる音で眠気が覚めた。

「…ん、もうこんなトコか…」

男は身の回りを確認し、場所を把握する。

そして、先程補給した水筒の水を一口飲み込む。

周りには、野生のポポヤガーグアが物珍しそうにこちらを見ているだけ。

別段変わった所は無い。

…いや、あった。

行商人は後ろを振り向いた。そこはガーグアが引いている積み荷を置く荷車である為、通常人が乗る事は無い。

だが、その荷車には計一名、人が乗っていた。

笠を深く被り、鎧に身を包んでいる男。

だが、腰に刀らしき物をぶら下げている時点で全く笑えない。

何でこんな得体の知れぬ男を乗せてしまった事を行商人は心底後悔した。

「おい、あんた」

「…あ、はい」

行商人の声で我に帰った男は笠越しにボリボリと頭を掻き、返事を返した。

声は女にしては低く、男にしては高かった。

「シレン村に用があるとか言ってたが、何の用だ？」

「…ちよつと呼ばれてまして」

「へえ…そうかい」

これ以上関わりたくないという気持ちもあつてか、行商人もそれ以上言つのを止めた。

やがて荷車が密林のデコボコした道に入り、人通りが無くなってきた。

・見られている気がする。

行商人は密林の何処からか視線を感じた。

咄嗟に周りを見渡す。

しかし、周りは落ち葉ばかりで誰も居ない。

居るとしても後ろに乗っている得体の知れない男だけだ。

気のせいか、と思って前方を向いた。

・その時だった。

「ギヤアアオアツ!!!」

突然空気が密度を増し、つんざくような巨大な咆哮が響き渡る。

次の瞬間、荷車は大木に激突していた。

襲撃者がガーグアに一撃を加え、横転させた事に気付くまでさほどかからなかった。

頭が軽く痛む。

荷車の後ろに乗っていた男の事等頭に入らず、襲撃者を探す。

その襲撃者は、全く異様な形をしていた。

周りを取り巻く暗い闇に似合わぬ透き通った白い皮。

竜のような巨大な翼。

しかし、何よりも異様だったのは顔だった。

首から先には目や耳は無く、あるのは口だけ。

口は既に原形を留めておらず、血のように真っ赤な口腔とノコギリ状に並んだ牙だけが覗いていた。

それは紛れもなく白き影の飛竜、フルフルだった。

ガジュツ…ガジュツ…！

襲撃者、フルフルは獲物であるガーグアにかぶりつき、その肉を噛み砕き、血を啜って行く。

「ゲルウ…」

「ひ、ひい…」

ガーグアの肉を粗方食べ終えたフルフルの首は行商人に向いた。

実際には、生肉が入った積み荷の方に向いたのだろうが、行商人の眼には自分が眼を付けられたと思っただろう。

フルフルは一步、二歩と寄ってくる。

ヨダレが垂れる牙を向けてフルフルは飛び掛かった。

「ガアアアアオツ!!」

「う…うわあああっ…!!」

フルフルの叫び声。

行商人の悲鳴。

それらが重なって、BGMを造り出していた。

カキーン!!

鋭い快音が響いた。

恐る恐る目を開ける行商人。

「あ、あんた…?」

「…くっ」

見ると、さっきまで荷車に乗っていた男は刀を抜き、フルフルの一撃を受け止めていた。

男の太刀とフルフルのノコギリ状の牙が競り合っていた。

「だあっ！」

男はフルフルの牙を蹴り飛ばし、距離を取ると行商人に叫んだ。

「危ないから離れて！」

その言葉を聞くと行商人はすぐさま木の後ろに避難する。

「グルウ…」

フルフルは鈍重な動きで男に近付くと、両翼を滅茶苦茶に振り回した。

バシッ！

男は間一髪で避けたが被っていた笠が飛び、男の顔が露になった。

黒いミディアムヘアの端正な顔立ち。

まだ15、6歳辺りなのか、何処か幼さを感じる。

だがそれと同時に、強き意志のある顔でもあった。多くの悲劇に会い、多くの涙を流して尚、強く、自分の足で立っているような、そんな感じだ。

「…よし、やるか！」

少年はふっと笑うと、太刀を構えフルフルへ向かって行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2441ba/>

BRAVE HEART ~ Last Dragon ~

2012年1月6日03時51分発行